無法文太と少女 「支配者」

tonebon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無法文太と少女 「支配者」

【Nコード】

N7260Z

【作者名】

tonebon

【あらすじ】

埼玉県にある「魔宮沼町」。そこは謎で奇つ怪で不思議な出来事が起こる町。そんな町にとある事情である一家が越してきました。とんでもない事件が待ち受けているとも知らずに…。

第1話（前書き）

その昔、武蔵の国に、史上最大にして最深の沼がありました。

その沼は、底無しの泥に無数の恨みのこもった遺体をもっていました。

怨念をまとったその沼の名は「魔宮沼」。

しかし、その沼も今では埋め立てられ、町もできました。

人々は希望こめて、その街を「魔宮沼町」と名付けました。

しかし、怨念を消すことはできなかつたのです。

怨念はその町の住人に影響をあたえて、数々の異常犯罪者を作りました。

怨念はその町の土地に影響をあたえて、数々の超常現象をおこしました。

いつのまにか……。

「魔宮沼町」は最も奇怪にして、最も危険な町になっていました。

第1話

私の名前は新田秋子。普通の高校一年生です。

この街も今日でさよならです。

住み慣れたお家も、通い慣れた通学路も、友達の春ちゃんや、

憧れの鈴木先輩も、今日でさよならです。

明日の朝は別の町の空の下で迎えます。

荷物が整理されて、がらんとした部屋は、わたしの部屋じゃない
ようです。

いつもは洋服箆笥の後ろに隠されて見えなかった柱。

カーペットの下に隠れてた畳。

いままでありがとう。

「秋子！ そろそろいくわよ」

お母さんの声。もう出発するんだ。

くるっと部屋の出口に向いて、扉を開けた。そっだ、最期に……

「さよなら！ わたしの部屋！」

扉の外からもう一度、部屋を見て、深く頭を下げて。

荷物は先に緑猫武蔵引越センターの人に送ってもらってる。わた
しの荷物も、

今着てる、白いワンピースを除いてみくんないっしょ。

ぬいぐるみのクマゴロもいっしょ。

わたし達……お父さん、お母さん、小学5年の弟の家族は、みんな揃って

電車で行きます。

新しい町へ。新しい家へ。

東京駅に出たら、もう19時を10分くらい過ぎていました。さすが休日。電車も

空いています。ここから「中武魔宮沼線」に乗り換えます。

銀の車体にオレンジのラインが入った車両の連なりが、静かにホ

ームに

入って来ます。さすが始発駅。余裕で座れました。

「さ、駅についたら起してやるから、少し寝てなさい」

お母さんの優しい声。実は少し疲れてます。あら、伸二ったらもう、いびきかいて。

じゃ、わたしも……。

気がつくと、わたしは暗闇に立っていました。ふと、目の前に、懐かしい人影が。

あの、すこし曲がった腰に、優しい顔は……

「おばあちゃん！」

去年、亡くなったおばあちゃんだ。とても優しく、大好きだったおばあちゃん。

わたしは、思わず抱きつきました。涙が出るかもしれない。でもいいや。頭に優しい手の感触。懐かしい温もり。

「秋子や」

懐かしい声で呼ばれて、うれしくて、急いでおばあちゃんの顔を見たら、

「おばあちゃん、なんで、そんなに悲しそうな顔をしているの？」

笑顔だったはずの顔が、悲しそうな顔だった。なんで？

「これから行く町はね、とても、とても恐ろしい町なんだよ。わたしの力じゃ、もう、

秋子を守ってやれないのさ。心配でしょうがないよ」

恐ろしい町？ これから行く町が？ あれ？ おばあちゃんの姿が薄くなってる。

「ほら、近くなるにつれて、おお、恐ろしい。なんて怨気なんだい

？ だめだよ、もう限界。いいかい、秋子！ 向こうについたら無法文太っていう…」
「おばあちゃん！」

おばあちゃんがない。あるのは、電車の椅子と家族。

「夢……？」

体中、汗だらけ。横で寝ていた伸二も、はあはあ言っ、飛び起きたみたい。

「怖い夢を見たのかい？」

心配そうにお父さんがわたし達を見つめてる。あれ、おかしいな。お父さん、なんだから、悲しそう。

20時25分。魔宮沼町駅につきました。

新天地への第一歩を踏んだ時、背中に冷たい氷でも入れられたみたいに、

寒気が走りました。

空気がひどく冷たい。

「極楽口」と書かれた改札を出た時、お父さんが

「みんなすまん……」

と言ったような気がしましたが、それがどんな意味を持つのかは、まだわかりませんでした。

朝が来た。新しい家は和風なムードで一発でお気に入り。

2階の6畳をわたしの部屋にもらって、もう最高。こんな広い部屋が、自分の部屋なんて夢みたい。

窓を開けて、新しい町の空気を吸う。おいしい！都会の空気と全然違う。

住宅街なのに、隣の家との間は充分すぎるほど開いている所もいい。

深い緑色の山が、三つほど風景にあるのも、自然とのバランスがとれていて最高！

寝巻を脱いで、新しい制服を着ると、くるっと1回転。スカートがひるがえる。

紺のブレザー。胸に大きな、赤いリボン。いいなあ、これ。これからの学生生活に、

すごく期待できそう。

「いつてきま〜す！」

元気よく言つて、道路に出た。新しい黒皮靴が、気持ちよく道路の感触を

伝えてくる。ああ、なんだかスキップしたい気分！最高の気分。

少し高いフェンスの向こうに見えてきた。

あれが、新しく通う「魔宮沼高校」か。白い鉄筋5階建てで、大きいアナログ時計

がシンボルみたいなの、すてきな学校。校庭も広いし、プールもある。

体育館もあるじゃない。

少し離れた建物は食堂かしら。男女生徒が入っていく、あれが校門ね。

わたしが校門へ行こうとした時、後ろに人の気配がした。振り返る瞬間、おなかに

痛みを感じて気が遠くなっていく。誰？男性の声が……不気味な

……声が……。

「ようじ、いい物が手に入ったぞ」

第1話（後書き）

昔、某所で書いた短編連載SSです。

菊地秀行大好きなので、設定などに影響がでています。
リハビリと精神修行のため、晒します。

ぐわーーー

第2話

頭が重い。ボーツとしてる。汗をかいているわ。

あ…あれ？ 手が動かない。あ、足も？

いやだ！ わたし、手足を縛られてる！

誰？ わたしをこんな格好で寝かせて、何をする気？

やだ！ 人の気配がする！ わたしを見ている！ 恐くて目を開けられない！

「なーんだあ？ どーしたんだおめえ」

はあ？ な、なんてぬけた声？ 寝惚けてるような声。

男の声らしいけど…。

わたしは勇気を振り絞って、目を開けた。

とたん…ここは天国かしら？ なんてきれいな顔をした…

微笑んだ天使がわたしを見下ろしている…。

「手足なんか縛って…マゾなんか？ おめえ」

はあ？ なに？

「ちよ、ちよっとまってよ！」

なによ、この男・顔がきれいだからって・縛ったのはこいつじゃないの？

「ふざけないで！ さっさとほどいてよお、変態！」

男の口が、へんの字に曲った。

「礼儀をしらん女だなあ」

男はブツブツ言いながら、縄をほどいた。手足が自由になったら、チャンス！ わたしだって…

「なめないでよ！ これでもわたし、柔道部なんだからあ！」

そう、前の学校では柔道部に入ってたのだ。

この、瞬時に立ち上がって構える腕のよさ。

へへ、どうだ、変態めって、あれ？ いない。さっきの男が。

「おい、礼儀しらず。下だ、下」

声が下から聴こえた…あら、まあ。てっきり背の高い筋肉変態だと思ってたら。

「か、かわいい」

つい、口に出してしまった。

わたしだって、背が高いほうじゃない。でも、この男は、わたしの

…頭二つ下…

140センチあるかないかという…。

「ば、ばかにするんじゃない！ 礼儀しらず、いや、恩しらず！」
きれいな顔をした背の低い変態は、部屋の扉からダッシュで消えた。

泣いていたかもしれない。…罪悪感がちよつとわいたけど…いいきみだわ。

すでに4時間目が終わって、お昼の時間も終わりがけていた。

まったく、転校早々にこんな目にあうなんて。しかも大遅刻なんて。

とりあえず、職員室に行く事にした。

本当なら、登校して一番に行く所だったのに、なんで、あんな部屋・理科室だった

のかな？ - に行かなきゃならないのよ。

あのチビスケ変態が全ていけないんだわ。

制服着てたから生徒よね。先生に言いつけてやる。

「職員室」と書かれた扉をガラツと開けた。

わたしは、呆然としていた。

先生が - ほんとに先生？ - いる。いるけど、あれは何？

机の上に祭壇を作って護摩を焚いて経を唱えてるメガネのガリガリ

先生、
真剣で汗水垂らして百本打ちやってるスマートな女教師、
試験官を片手に怪しげな薬の調合しているバーコード頭の中年教師、
異常に膨れ上がった右腕の筋肉で1トンと書かれた鉄アレイを上げ
るジャージの
体育教師。

見てはいけない秘密の儀式のような雰囲気。

わたしの頭にあった先生のイメージがガラガラと崩れていく。

その時、いきなり肩を叩かれた。振り向くと、そこには長い白
髪を垂らした、

幽霊が立っていた。怪談映画に出てきそうな白衣の男幽霊！

「きゃああ！」

わたしは、悲鳴を上げた。先生達の視線が、じろりとわたしに集
まる。

「み、見てませんっ！ わたしは何も見ません！」

「何を言っとる〜、おまえ、新田秋子だろ〜」

肩を叩いた幽霊が、ぴつたりな声で言った。いやだ、この幽霊、

わたしの名前を知ってる！ 怖い！ 助けて！

「しつかりせんかい〜担任の幽霊だ」

とたんに、職員室が大爆笑になった。

恐怖から、いきなり笑いになって、わたしは混乱した。

信じられない。この人達が先生？ この、どう見ても幽霊にしか
見えない人が？

朝から変な事が多すぎるわ。夢見てるのかしら、とびきり怖い悪夢
を。

「今までどこで、さぼってたあ〜」

さぼってた？ え？ 違うわ！ わたしは・・・やっぱり先生だわ、
この幽霊。

「よく、わかりませんが、理科室みたいな教室で縛られてました。

さぼりじゃありません！」

「ほお〜」

え？ あ、しまった。

「ち、違うわ！ 変な事じゃないです。登校中に……」

そこまで言って、幽霊教師の表情が違うのに気がついた。いやらしい想像をした顔

じゃない。

「理科室か。あそこは一年前から消えちゃってなあ〜」

「は？」

「いや、後で話してやる〜。とにかく、教室へ行くぞお〜」

この先生は、わたしが縛られていた事には、まったく興味ないみたい。

で、理科室が消えた？ 一年前から？ はあ。

ま、とにかく、やっと教室に入れるのね。

階段を上がって…あれ？ 四階分くらいは上がった気がしたんだけど、廊下に3

の字。おかしいな。

「あれ先生、ここ、四階じゃあ？」

「よくあることだ〜。ここは三階〜」

はあ。まあ、いいわ。

おお、見えた。一年四組の教室。

友達いっぱい、できたらいいな。素敵な男子いるかな？ わく

わくするなあ。

木製の扉の向こうでは、クラスメイトになる生徒達のワイワイ声。どんな話しをしてるのかな？

「あぶないぞお〜」

扉の向こうから聞こえた。へ？

「新田、あぶないぞ〜。どけ」

幽鬼先生が言った。へ???

扉がわたしに飛んできた。へ?????

「いたあ！」

直撃。いたい！ 衝撃で廊下に尻もちついた。扉がわたしの上に
乗ってくる。

「ぐわおお！」

声が出た。一瞬。でも、心が瞬時に凍りつくような声。いえ、鳴
き声？ お尻の傷

みをこらえて声の方を見たら、いた。いたけど、なに？ 犬、いえ
狼？ 茶色の毛で

包まれた四本足の獣がいる。目があった。黒い目がわたしを見てい
る。ぱっくり裂け

た大きな口から、鋭い歯の行列が見える。動けない。声も出せない。
これが、金縛り

なの？

「まちやがれ、犬狼！」

その声が、わたしを金縛りから解き、狼を怯ませた。

狼は、一声鳴くと、廊下を失踪していった。

「こらあゝ犬狼！ 廊下は走っちゃいかん！」

幽鬼先生の声。狼がこけた。

呆然。また、呆然。廊下に座り込んだまま呆然。左肩には、外れ
て倒れてきた扉が

乗ったまま。

「無法、また喧嘩か？」

「幽鬼先生！ 犬狼の奴、俺を”ちっけー”って言ったんですよ」

「またか？」

何事も無かったように続けられる、先生と生徒の会話。なんなの
よ、この学校は。

やっと、教室に来たと思つたら、変な狼がでてくるし。もう、いや！
悲しくなってきた。目頭が熱くなってくる。いいもん、泣いてや
る。

その時、手が出てきた。わたしの目の前に。

「わるいなあ、確認する暇がなかったんでなあ」
寝惚けたような声と共に。

その声は、不思議に、わたしの悲しみを解いてくれた。ん？
まって。どこかで聞いたような声だわ。

足を見る。スラリとした足が、グレーのスラックスに包まれている。

あれ、もう、身体が見えた。あまり背の高い人じゃない。グレーのブレザーのボタンは止められていない。その下には白いワイシャツ。

黒い長髪に包まれた、綺麗な、それでいて、凜々しい男らしさを感じさせる顔。太

い眉毛がそれを引き立てている。

…あれ？

「あーっ、チビスケ変態！」

まちがいない、あの、背の低い変態！

「なっ…なにいーっ！ 恩知らずのくせに、チチチチチチチ、チビスケだとお！」

「な、なによっ！ せ、先生、こいつ、こいつがわたしを……」

ん、先生？ いない。

「さっさと入れ〜授業だ」

え。いつのまにか、教壇に立っている。そして、生徒の爆笑。

「えーい、うるさいっ。恩知らずっ、必ず決着つけるぞお」

爆笑をかきわけ、チビスケ変態は席についた。あんな後ろで黒板みえるのかしら。

「よし、新田〜こい」

先生に呼ばれて、教壇の横に立った。おお、同級生のみんな！とチビスケ。

やっぱり、初めが肝心。緊張するなあ。

「転校してきた新田秋子だ〜。なんと、理科室に目をつけられたぞ

」

「よろしく願います！ …え？」

同級生の目が変わった。それは、恐怖であり、驚きであり、哀れみでもあり。いつ

たいどうしたの？ 理科室に目をつけられるってなに？

さ、最悪な初め。どうして？ わたしがなにかしたの？

席を指定されて、腰掛けた後も、みんなわたしをちらちら見てる。

孤独：わたし、いきなり村八分にされちゃた。なんで…。

悲しくなつて、どうしようもなく悲しくなつて、うつむいた時、

「おい、恩知らず。腹でも減ったか？」

ん、あれ？ チ、チビスケ変態の隣の席だったんだ。

「う、うるさいわね。ほつといてよ…変態」

そうだわ。こいつがいけないのよ。すべてこいつが…。

「おりゃあ、無法文太っていう。授業終わったらつきあえ」

な、なによ…

「なによ、まだわたしに悪さする気！？」

「いや。俺がチビじゃねーって所を見せてやるのよ」

そして…チャイムが鳴り、休み時間になった。みんなは、あいかわらず、変な視

線で、わたしを見ている。いや、一人違った。

「さ、来てもらおうか」

第2話（後書き）

昔、某所で書いた短編連載SSです。

菊地秀行大好きなので、設定などに影響がでています。

リハビリと精神修行のため、晒します。

ぐわーーー

第3話

チビスケ変態のくせして綺麗な顔してる変な奴、無法って言ったかしら。

転校初日を台無しにした張本人。ゆるせないわ。

「どこに連れてく気よ」

「…とりあえず体育館裏、だな」

どき。体育館裏ですって？ なのよこの変態、わたしとケンカでもする気？

あつたまにくる。チビのくせに。制服だろーが、スカートだろーが、もういいわ。

そっちがその気なら柔道部の腕前を味わってもらっわ。

変態の後について誘われるまま、校庭に出て青い屋根の体育館の裏へ。

体育館の壁と高いコンクリートの壁に挟まれて薄暗い。

ん？ おかしいわ。陰に、体育館の陰に入った途端、なんだか寒い。季節が一気に

冬に…いえ、南極にでもなったかのような……もう花見も終わる季節なのに。

「ぶわっくしょんっ」

思わず、くしゃみ。それをまっていたかのように、チビスケが振り向いた。

「寒いか」

「寒いわよ…なんか変よ、ここ。いえ、この学校、みんな変だわっ」

「…ま、いいや」

その時、チャイムが鳴った。六時間目がはじまる！
とりあえず、わたし達は教室に走った。

「俺は無法。無法文太って覚えておきな」
走りながら…無法…くんは言った。

無法文太…。

チビスケじゃないかもしれないけど、怪物で変態なんだってのは
わかったわ。

すでに授業が始まっていた。六時間目は…数学だった。

わたしは数学が苦手だ。この変な学校の数学も普通と変わらな
かった。残念。

無法くんのおかげですっかり忘れちゃったけど、理科室ってなん
だろ？

理科室は、理科の授業で、実験なんかをする教室です。

普通はそう。でも、この学校では違うみたい。

幽鬼先生が言っていた。一年前から消えちゃった？ 理科室が？
目をつけられる？ 理科室に？

わたしはそこで縛られていた…無法くん。

なにがなんだか、さっぱりわかめラーメン。

「では、ここを新田、答えてみなさい」

やっぱりうまいぞソース焼そばって、は？

「新田、この問題の答えだ」

さ、さされた！！ さされちゃった！！ 転校初日だったのにさ
された！

問題は黒板に…なにも書いてない！！ 教科書？ 何ページのど
こ？

なんでわたしをさすのよ、このペヤング先生！！

顔が真四角で、白い、まるでコックさんのような服を着てるから
ペヤング先生って

決めたのだ。さっき。おかげでカップラーメンの想像したじゃない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7260z/>

無法文太と少女 「支配者」

2011年12月24日02時48分発行